新版歌祭文（しんぱんうたざいもん）

〔解　説〕

安永九年（一七八〇）九月竹本座初演。作は近松半二（一七二八～一七八六）です。お染久松の心中を扱った「袂の白しぼり」（一七一一）や「染模様妹背門松」から登場人物、筋書き、有名な文句までもそのまま使った「お染久松物」の決定版で、上中下の三巻からなっています。中でも上の巻「野崎村の段」は度々上演され、段切りの旋律は多くの人に知られています。

〔野崎村の段　あらすじ〕

油屋の丁稚久松は、集金した金を贋金とすり替えられ、野崎村の養父久作の元へ返されています。久作は重病で盲目となった後妻、そしてその連れ子のお光と暮らしていますが、ゆくゆくは久松とお光を夫婦にしようと思っていました。久松が戻ったので、祝言をあげさせようとお光に支度をさせているところへ、かねてから久松と恋仲の油屋の娘お染が、跡を追って訪ねてきます。心中をも覚悟する二人に久作は意見して、別れることを納得させますが、お光は二人の気持ちは揺るがないと悟り、自分が尼僧になることで、二人を一緒にさせようとします。その様子を外で聞いていた油屋の後家は、前に久作が手代の小助に渡した金を尼への布施として差し出します。世間を憚り、久松は駕籠、油屋母娘は舟で大坂へと戻っていくのでした。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

野崎村の段

引き立て、入りにける。後に娘は、気もいそ〳〵、

「日頃の願ひが叶ふたも、天神様や観音様、第一は親のお蔭。エヽこんな事なら今朝あたり、髪も結ふて置かふもの。鉄漿（かね）の付け様挨拶もどふ言ふてよかろやら」

覚束鱠拵（おぼつかなますこしら）へも、祝ふ大根の友白髪、末菜刀と気も勇み、手元も軽ふちよきちよき、ちよき、切つても、切れぬ恋衣や、元の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、あとを慕うて野崎村堤伝ひにやうやうと、梅を目当てに軒のつま。供のおよしが声高に、

「もうし御寮人様。かの人に逢はふばかり、寒い時分の野崎参り。今船の上り場で、教へてもらうた目印のこの梅。大方ここでござりませうぞえ」

「アアコレもそつと静かにいやいなう。久松に逢ひたさに、来ごとは来ても在所の事、目立つては気の毒。そなたは船へサ早ふ〳〵」

と追ひやり追ひやり

「物もふお頼みもうしませふ」

といふもこはごは暖簾越し、

「百姓のうちへ改まつた。用があるなら這入らしやんせ」

「ハイハイ卒爾ながら久作様はうち方でござんすかえ。さやうなら大坂から久松といふ人が今日戻つて見えた筈。ちよつと逢はして下さんせ」

といふ詞つき姿かたち。

「常々聞いた油屋のさてはお染」

と恪気の初物胸はもやもやかき交ぜ鱠俎（まないた）押しやり、戸口に立寄り見れば見るほど、

「美しい。あた可愛らしいその顔で、久松様に逢はしてくれ。オホそんなお方はこちや知らぬ。よそを尋ねて見やしやんせ阿呆らしい」
と腹立ち声。心付かねば、
「ホンニマア、なんぞ土産と思うても急な事、コレ〳〵女子衆、さもしけれどもこれなりと」
と夢にもそれと白玉か露を袱紗に包のまま、差出せば、
「こりやなんぢやえ。大所の御寮人様、様々と言はれても心が至らぬ置かしやんせ。在所の女と悔つてか、欲しくばお前にやるわいな」
とやら腹立ちに門口へほればほどけてばらばらと、草にも露銀芥子（つゆがねけし）人形、微塵に香箱割り出した。中へつかつか親子連、出てくる久作。
「アどうぢやどうぢや鱠は出来たであらう。さて祝言のこと婆が聞いてきつい悦び。ぢやが年は寄るまいもの。さつきのやつさもつさで、取りのぼしたか頭痛もする。アヽヽいかう肩がつかへて来た。橙の数は争はれぬものぢやわいの」
「さやうならそろそろ私が揉んで上げませうか」
「ソリヤ久松忝い。老いては子に随へぢや。孝行にかたみ恨みのないやうに、コレおみつよ三里をするゑてくれ」
「アイアイ、そんなら風の来ぬやうに」
となにがな表へ当り眼、門の戸びつしやりさしもぐさ。
「サア〳〵親子とて遠慮はない。もぐさも痃癖（けんぴき）も大掴みにやつてくれ」
「アイ〳〵コリヤマアきつうつかへてござりますぞえ」

「さうであらうさうであらう。ついでに七九もやつてたも。オツトこたへるぞこたへるぞ」
「サア父様するゑますぞえ」
「アツアツアアア、アアえらいぞえらいぞ。ハヽヽヽイヤモウモウあすが日死なうと火葬は止めにして貰ひませう。丈夫に見えても古家。屋根も根太もこりや一時に割普請ぢや。アツ〳〵〳〵」
「オオ父様の仰山な。皮切はもうしまゐでござんす。ホンニ風が当ると思や。誰ぢや表を開けたさうな。締めて参じよ」
と立つを、引止め、
「ハテよいわいの。昼中にうつとしい。ノウ久松、久松、久松、コリヤ久松。よそ見してゐずと、しか〳〵と揉まぬかいの」
「サアよそ見はせぬけれど、覗くが悪い。折が悪い、悪い〳〵」
と目顔の仕かた。
「ヤ悪いの覗くのと、足に灸こそすゑてゐれ、どこもおみつは覗きはせぬが」
「サアアノ悪いと言ひましたは、確か今日は瘟こう日。それに灸は悪い〳〵とサいうたのでござります」
「エヽ愚痴なことを。このやうに達者なは、ちよこ〳〵と灸をする作りをする、そこで久作。アツ〳〵やっぱり熱いわいハヽヽヽ。ムなんぢやわい、わが身達も、達者なやうに、灸でもすゑるのがおいらへの孝行ぢやぞや」
「オヽさうでござんすとも。久松様には振袖の美しい持病があつて、招いたり呼出したり、憎てらしい、あの病ひづらが這入らぬやうに、敷居の上へエヽ大きうしてすゑて置きたいわいな」

「アツイ〳〵おみつ、なんするぞい〳〵。そこは頭ぢやがな〳〵コリヤ、頭に三里があるかいやい。アアトツトモウ、えらい目に合はすがな　ハヽヽヽ」
「コレおみつ殿。振袖の持病のと色々の耳こすり、はしたない事聞いてはゐぬぞや」
「ホヽヽ変つた事がお気に障つた」
「ホヽ障らいぢや」
「コリヤをかしい。その訳聞くぞえ」
「いふぞや」
と我を忘れていさかいを、外に聞く身の気の毒さ、振りの肌着に玉の汗。久作ももてあつかひ、
「コリヤヤイ、コリヤ肩も足もびり〳〵するがな、びり〳〵。まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかひの取越しかい。灸行（やいとぎょう）の代り喧嘩の行司さすのかやい。二人ながらエヽ嗜めたしなめ」
「イエ〳〵構ふて下さんすな。今のやうな愛想づかしも病づらめが言はしくつさるのぢやわいなア」
「ハヽヽなにをいふやらモウ〳〵両方ともおれが貰ひぢや。ヨヽヽ仲直しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり鉄漿もつけたり、湯もつかふて花嫁御を、コリヤ作つて置け」
と打笑ひ無理に納戸へ連れて行く。その間おそしと駈入るお染。
「逢ひたかつた」
と久松にすがりつけば、
「アヽコレ声が高ふござります。思ひがけないここへはどうして、訳を聞かして聞かして」
と問はれてやう〳〵顔を上げ、
「訳はそつちに覚えがあらう。わしが事は思ひ切り、山家屋へ嫁入りせいと、残しておきやつたコレこの

文。そなたは思ひ切る気でも、私やなんほでもえ切らぬ。あんまり逢ひたさ懐しさ。勿体ない事ながら、観音様をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ。二人一緒に添はうなら、ままも炊かうし織りつむぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女の道を背けとは、聞へぬわいの胴欲」

と恨みのたけを夕禅の、振りの袂に北時雨、晴間はさらになかりけり。曇りがちなる久松も、背撫でさすり声ひそめ、

「そのお恨みは聞へてあれど、十の年から今日が日まで船車にも積まれぬ御恩。仇で返す身のいたづら。冥加のほども恐しければ、委細は文に残したとおり山家屋へござるのが母御へ孝行家のため、よう得心をなされや」

と言へど、答も涙声。

「いやぢやいやぢや私やいやぢや。今となつてさう言やるは、これまでわしに隠しやつた、許嫁の娘御と女夫になりたい心ぢやの。ぜひ山家屋へ行けならば覚悟はとうから極めてゐる」

と用意の剃刀取直せば

「それは短気」

と久松が止めても、とまらず、

「イヤ〳〵〳〵、そなたに別れ片時も、なに楽しみに生きてゐよふ。止めずと殺して殺して」

と思ひ詰めたるその風情。

「そんならこれほどもうしても、お聞き分けはござりませぬか」

「添はれぬ時は死ぬるといふ、誓紙に嘘がつかれうかいなふ」

「ハアたつてもうせば主殺し。命に代へてそれほどまでに」
「思ふが無理か女房ぢやもの」
「叶はぬ時は私も一緒にお染様」
「久松」
と互に手に手を取りかはす、悪縁深き契りかや。始終後に立聞く親。
「その思案悪からう」
と、言われて『はつ』と久松、お染。騒ぐを押へて、
「ア、大事ない大事ない。マア〳〵下にゐや下にゐや。ハテマア下にゐやいの。アヽ因縁とは言ひながら、和泉の国石津の御家中、相良丈太夫様といふれこさの息子殿、いささかの事で家が潰れてから、わが身の乳母はおれが妹、その縁で十の年まで、育て上げたこの久作は後の親。草深い在所に置こふより、智恵付けのため油屋へ丁稚奉公。それほどまでに成人して商売の道読み書きまで、人並になつたはコリヤコレ親方の大恩。若い水の出端には、そこらの義理もへちまの皮と投げやつて、こなさんといつまでも、添ひ遂げられるにしてからが、戸は立てられぬ世上の口ぢやわい。エ、あの久松めは辛抱した女房嫌うて、身上のよい油屋の婿になつたは、アリヤアレ、栄耀がしたさぢや皆慾ぢや。人の皮着た畜生めと、在所は勿論大坂中に指さされ、人交りがなりませうかいの。コレ〳〵〳〵、ここの道理を聞分けて、思ひ切つて下され。コレ拝みます〳〵、拝みますわいの。フムこれほどいうても返事のないはコリヤ二人ながら不得心ぢやの」
「アヽ勿体ない。実の親にも勝つた御恩、送らぬのみか苦をかけるも、私が不所存から」

「イヤ〳〵そなたの科ではない。みんなこの身の徒らから、親にも身にも代へまいと、思ひ詰めても世の中の義理にはどうも代へられぬ。なるほど思ひ切りませう」

「オヽよう御合点なされました。私もふつつり思ひ切り、おみつと祝言致しまする」

「そんならそなたも」

「お前も」

と互に目と、目に知らせ合ふ心の覚悟は、しら髪の親仁。

「アノさつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたもるか」

「なんの嘘をもふしませふ」

「ムヽ娘御も今の詞に微塵も違ひはござりませぬか」

「久松の事はこれ限り、私や嫁入をするわいの」

「出来た〳〵〳〵。アヽむくつけな親父めと腹も立てず、よう聞き入れて下さりました。息のある内祝言が済んだと聞かして下さるが大きな善根。善は急げぢや、おみつ〳〵」

と尻軽に立つて一ト間を差覗き、

「ハテ出ぐすみをしてをるわ。それでは果てぬ」

と手を取つて、

「サア〳〵嫁の座へ直つたり〳〵。一家一門着のままの祝言に改まつた綿帽子、エヽうつとしかろう取つてやろ」

と脱がすはずみに、こうがいも抜けて惜しげもなげ島田、根よりふつつと切髪を、見るに驚く久松、お染、久作呆れて、

「こりやどうぢや」

といふ口おさへて、

「コレもうし父様もお二人様も、なんにもいうて下さんすな。最前からなに事も残らず聞いてをりました。思ひ切つたといはしやんすは、義理に迫つた表向。底の心はお二人ながら死ぬる覚悟、ム、サ死ぬる覚悟でゐやしやんす、母様のアノ大病。どうぞ命が取りとめたさ。私やもうとんと思ひ切つた。ナ、サ切つて祝うた髪かたち、見て下さんせ」

と両肌を脱いだ下着は白無垢の、首にかけたる五条袈裟思ひ切つたる目の中に浮む涙は水晶の、玉より清き貞心に、今更なんと詞さへ涙呑み込み、呑み込んでこたゆるつらさ久松、お染。久作も手を合せ、

「なんにもいはぬこの通りぢや、この通りぢや。女夫にしたいばつかりに、そこら辺りに心もつかず、蕾の花を散らして退けたは、みなおれが鈍なから、赦してくれ」

も口のうち、聞へ憚る忍び泣き。

「アヽ冥加ない事おつしやります。所詮望みは叶ふまいと思ひのほか祝言の、盃するやうになつて嬉しかつたはたつた半時。無理に私が添はうとすれば死なしやんすを知りながら、どう盃がなりませうぞいな」

四人の涙八ツの袖。榎並八ケの落し水膝の、堤や越えぬらん。久作涙押拭ひ、

「どうやらかうやら合点がいたさうな。さぞ母御様が案じてござらう。大事な娘御確かな者に」

「イヤそれにはおよびませぬ。母が確かに請取りました」

と言ひつつ這入れば、

「ヤア母様。ハア」

『はつ』とばかりに詞なく差俯向けば、

「コレお染。野崎参りしやつたと聞いてあんまり気遣ひさ。イヤ気慰みによからうと跡追うて来てなに事も残らず聞いた。夫婦の衆の親切、おみつ女郎の志。最前からあの表で、私や拝んでばつかりゐましたわいなう。観音様の御利生で、怪我過ちのなかつた嬉しさ。これから直ぐにお礼参り。幸ひ私が乗つて来たあの駕籠でコレ久松。そなたは堤お染は船。別れ別れにゐぬるのが、世上の補ひ心の遠慮」

「さやうでござりまするとも。お志ぢや乗つてゐにや」

「娘は船へ」

と親、親の、詞に否も言ひ兼ぬる、鴛鴦の片羽の片々に別れて二人は乗り移れば、

「兄様お健でお染様、もうおさらば」

と詞まで早や改まるおみつ尼。哀れをよそにみなれ棹、

「船にも積まれぬお主の御恩。親の恵の冥加ない取り分けておみつ様。かうなりくだるも前の世の定り事と諦めて、お年寄られた親達の介抱頼む」

といひさして泣く音伏籠の面ぶせ。船の中にも声上げて、

「よしないわしゆゑおみつ様の、縁を切らしたお憎しみ堪忍して下さんせ」

「アヽわつけもないお染様。浮世離れた尼ぢやもの。そんな心を勿体ない。短気起して下さんすな」

「オヽ娘がいふとほり、死んで花実は咲かぬ梅、一本花にならぬやう、目出たい盛りを見せてくれ。随分達者で」

「ハイ〳〵お前も御無事で」

「お袋様もお娘御もおさらば」

「さらば」

「さらば」

「さらば」

も遠ざかる船と、堤は隔たれど縁の引綱一筋に、思ひあうたる恋中も義理の柵情のかせ杭、駕籠に比翼を、引き分くる心々ぞ世なりけり。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。